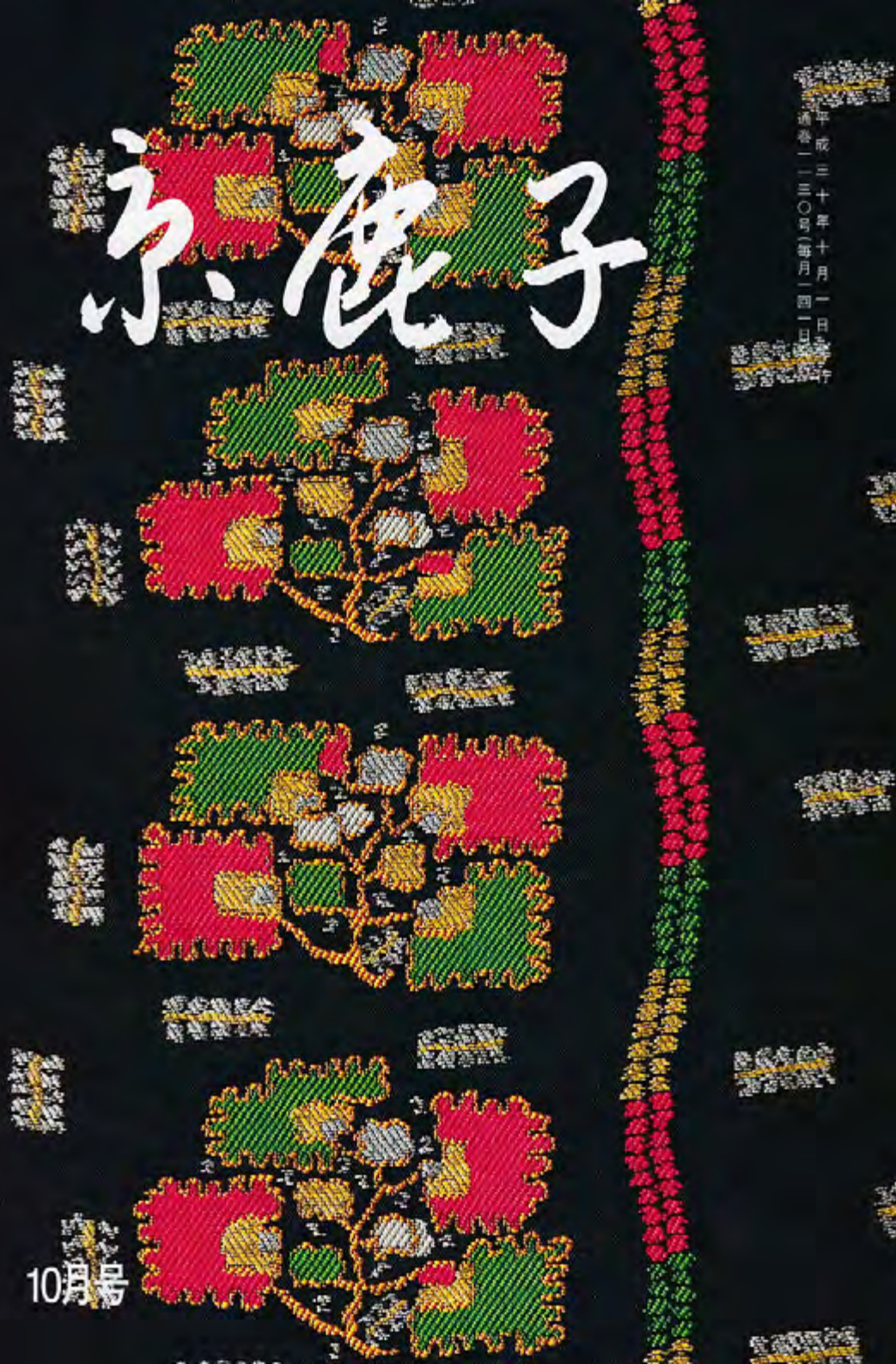


京鹿子

平成三十年十月一日発行
通巻一三〇号(毎月一回)発行

10月号



— 近 詠 —

鈴 鹿 呂 仁

拾 掬 集 その三十七



迎へ火や妻の庭下駄弛ませる
送り火ひとつ山巔の万の闇
女院てふ重き通り名白木槿
秋の蚊や我が利き腕の鈍らよ
富士八海色なき風の素数めく
苧殻焚く短き箸に影生る



秋 蜘蛛の無聊を吐きぬ鉄格子
白 桃の傷つく闇を愛ほしむ
滝 口の風断つ念誦赤とんぼ
化 野の風は骸へ夜の秋
草 庵のひかへ目な空嵯峨晩夏
神 さぶる古道の行く手嵯峨白秋
爽 やかに浅瀬に解く枷ひとつ
木 洩れ日を拾ふ美山路爽やかに



— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

三和土の闇

爽涼や洋皿に触るスプーン音

百年の三和土の闇の鉦叩

けふの日を仏ごころに朝ちちろ

— 追 懐 —

煩悩に行く芋虫の楢円形

秋の蜂日めぐりぐらし不憫なり



—
近 詠
—

和田 照海

鱧の皮

雲 梯 の 錆 を 掴 み て 広 島 忌
纜 の 軋 み に 燃 ゆ る 夜 光 虫
被 爆 ド ー ム よ り 呻 吟 の 油 蟬
馴 染 顔 ゐ て 夕 風 の 古 本 屋
晚 節 を 汚 さ ぬ や う に 鱧 の 皮



松本 鷹根

夕 散歩

齒切れ良き蟬声朝の食勢む

蟬しぐれ下枝風に開襟す

緑蔭の長明庵史黙読す

晩夏影伸ばし尽くして夕散歩

灯し初む夕焼盆地神話めく



近 詠

塩貝 朱千

瑠璃柳

魚影に魚がおどろく嵯峨素秋

瑠璃柳の花散り急ぐ風を抱き

夕づつや木槿はけふの幸を巻く

一念を崩すは易し蓮四日

ドラキュラが笑ふ石榴が三つ爆ぜ

英華採集

紫陽花や雨に重なる雨の音

福山北村 梢

紫陽花と言えば雨は付き物となるが、殊更雨を強調することによって逆にその効果を引き出すこともある。普通、雨の音は「雨が降って来た」と平面で捉えるると一つの音に過ぎないが立面で捉えようと様々な音を醸し出しているのではないか。それが重なり合う音は無限の音を出しているとも言える。紫陽花は、これらの音に反応し喜びの気持ちの色によって表しているのだろう。「あ」音の母音の韻が、リズムを生み出していることも見逃せない。

目が合うて金魚二匹を籍に入れ

京都 菊池 和子

金魚鉢の中の二匹の金魚。時々作者の視線を感じながら尾を振ったり反転したりして媚びを呈している。ある時、二匹と目が合った時に言い様のない愛しさを感じたのである。我が子のように籍に入れたという表現が実に俳味がありその時の作者の気持ちを表している。ところでこの二匹の金魚を夫婦として見立てて婚姻の籍を入れ認めてあげた、とするのは深読みだろうか？

蚊遣香定石本の伏せしまま

京都 落合 幸子

藤井聡太四段（当時）の中学生棋士が、一時話題となり二十九連勝という前人未到大の記録を達成した。掲句の定石本は、囲碁の世界での石の置き方を独りで練習するための方法手順を定めたものである。その定石本が縁側に伏せられたままになっている。伏せたあとの事が省略されているが、蚊遣香の季語が実によく効いている。定石本を見ていた人、何故伏せてあるのか、今その人はどうしているのか、等その情景は自ずと想像出来ることになる。

神麓集

かき水 藤岡紫水

子が力むほど斗はず兜虫
迎火の燃え殻残し戻る闇
かき氷舌代と書く勘定流
銀河濃し二夕夜の雨に洗はれて
情念のほむら消したく髪洗ふ

蝗とぶ 沼田巴字

行く秋や仁王の一人遠目して
誰も来ぬ裏道なれや猫じやらし
木犀やそよ風のみを友として
自由になるよろこびなのか木の実落つ
生も死も草の中なり蝗とぶ

地獄絵 丸井巴水

秋の風仏ごころがふと涌けり
腹割つて佛を見せる寺涼し
遅速なき添水の古刹縁を得る
建材のすき一本の蛇が抜け
地獄絵に似た顔ありて迎へ鐘

男梅雨 植村蘇星

梅雨晴間心の晴間一句二句
蒼空やあつけらかなの男梅雨
天心の月のはにかむ逢瀬かな
神がかりならむ一雨七変化
冷し馬まなこ細めて尾を振れり

神麓集

花びらの奥

北川 孝子

青林檎はじめての恋遠きまま
哲学の片鱗もなく水を打つ
薔薇描く花びらの奥深くまで
青水無月猫大らかにくさめして
遺句集に葉を深く夕焼雲

紫陽花

直江 裕子

水無月を眠る喪った日と眠る
衰へて世話なく生える草をひく
セロファンの表紙ほろほろ書を曝す
紫陽花やまだある答をしまひこむ
菜の花ぼっちこは朝から昏れてゐる

枇杷の種

高木 晶子

目印とならぬ紫陽花夕まぐれ
寿命百年艶々として枇杷の種
椿の実落し所を決められぬ
長旅の西瓜をここで終らせる
曲り角又間違ひて半夏生

水脈を曳く

伊藤 希胎

脳天をぐぐつと握る大暑かな
山畑の焦げゐる匂ひ大旱
落蟬の絶えきれぬ声地にこぼし
水脈を曳く蛙目で追ひ握り飯
蛸の宵を鎮めむ父帰る

神麓集

鳴き直す

奥田筆子

たんぽぽの絮吹きみんなぬなくなる
鳴き直す老鶯われの学習塾
泥酔の月下美人を見てしまふ
バードウィーク青い声帯拾ひけり
樹齢から見ればにんげんかげろふなり

永久欠番

井上菜摘子

母とおなじ頁をあるく麦の秋
嘘つぽい昨日へはなつ草矢かな
六月の蹴鞠日和を蹴りあぐむ
夏帽子君を永久欠番に
ゆふやけの町終点のアナウンス

青林檎

村田あを衣

神水汲む梅雨の晴間の空を汲む
未来図の真ん中に置く青林檎
本籍は寺苑にをさめ蟬の寺
夏休み海みる為の特急券
身の奥の火種起こされシャワー浴ぶ





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

振花を序として一葉ものがたり

水無月の月光で濾す血の濁り

石蹴りで帰りしあの道茱萸熟るる

凌霄の飛び火しさうな地震の後

水打ちて置屋小路に下駄の音

水の宮訪ふ水無月の水ごころ

梅雨鳩のときどき笑ふ時間帯

水母浮く予備の電池を携へて

水無月のたつぷり使ふ美顔水

薔薇に背を向けての内緒話かな

京田辺 山中志津子

京都 井尻 妙子

町の名は城下のなごり風青し

百選の水の心音新樹光

睡蓮のはばかりながら浪漫派

青りんご丸ごとかじる未来像

お話のハッピーエンドさくらんぼ

昼顔は波のことばを聞くばかり

梅雨明けを一気に映す床みどり

いのちまで透きて見えたり仔かまきり

蜘蛛の囿や傘の骨より強さうな

くちなしの花錆びてより夕べ来る

城陽 鷺山 珀眉

京都 片山 熙子

賞でられぬままに常磐木落葉かな
頁閉ち一日を仕舞ふ青葉木菟

福 山 亀井 福恵

月下美人咲かせ市井に住み古りぬ
風立ちて白薔薇白を研ぎ澄ます

ばら園を待ちせてある大道芸

大御神鎮めたまへよ暴れ梅雨

福 知 山 西村 滋子

強雨耐へ花くちなしの匂ふかな

空蟬や無人駅のがらんどう

走りても追ひ越せぬ影白日傘

さざ波に影おとしゆく夏の蝶



紫陽花や雨に重なる雨の音

福 山 北村 梢

つばめ反る両替町から銀座町

八月の空押し上げてコカコーラ

蜘蛛の巣の未完のままに朝日かな

目が合うて金魚二匹を籍に入れ

薄紫陽花未生の恋のひとしづく

京 都 菊池 和子

打水の風のあいまい夕床几

ふる里をしのぶ高さに桐咲いて
蚊遣香定石本の伏せしまま

落合 幸子

家計簿の帳尻合はず梅雨の雷

放課後の軽音楽部夾竹桃

説教に耳傾ける送り梅雨

アリソナ 伊吹 之博

チェロケース横に抱く児の夏休み

母のせな虹掴まむと稚の反る

はんなりを決め込む猫や夕端居

空蟬や同窓名簿・不明欄

酒 田 藤波 松山

青薦の這ひ廻りたる古土蔵

夏木立園児の声や風に乗る

更衣時計あと白左腕

浪 川 東 秋茄子

海の曲流れる朝や柿若葉

空梅雨が雨風となり閉ぢこもる

六月果つ息子の旅立ち人寄せず

夏めきて祭りの準備にかり出され

八月も一人の日々は淋しくて

整列し遍路は読経六角堂

大の文字くつきり残し山笑ふ

さいたま 神田 惣介

紫陽花や忘れずに咲く庭の隅
橋渡る舞妓は浴衣デパートへ